

台湾における仏教は福建広東より渡来せしものにして、鄭氏の建立せし台南の阿弥陀寺を初めとして皆禪宗の一派すなわち臨済宗なり。禪は本来「直指人心見性成仏」といい、「教義別伝不立文字」といい、経によらず仏菩薩によらず禪よりも定に入り定めより慧を得、直に人々固有の本性を発揮するをもって本義とす。しかるに今や形体変じて卑近のものとなり経文を読誦し、死者の冥福を祈り諸仏諸菩薩を客観の地に置いてこれに帰依することあたかも浄土宗に異ならず。台湾の寺内に奉祀しあるは阿弥陀・釈迦・観音・地藏・達磨・羅漢等にして祖師と称するは達磨を指称し、清水祖師と称するは厦門清水巖より分香せしものなり。そうして本島において最も崇拜するは観音にして寺廟および各家の神卓に木造または陶器製、あるいは紙に書かしたる女像は皆観音を祀りしものなり。台湾の寺にして著名なるは、台南の開元寺・法華寺・竹溪寺、台北の龍山寺等なり。

第一款 僧侶の資格

僧侶の資格は授戒を要す。その授戒は曹洞臨済等と同じく、沙弥戒・比丘戒・菩薩戒の三壇戒あり。そうして授戒は支那福州鼓山湧泉禪寺または同怡山長慶寺・浙江普陀山普濟禪寺において授戒し台湾に来たり、各寺の住職となるものなり。現に対南開元寺の僧傳芳師は鼓山湧泉禪寺より来たれる人なり。しかるに本島にあるところの僧の多くは受戒せしもの少なく、従って先年赤山巖における焚死成仏のごとき迷信僧侶を出せるものなりという。

第二款 僧侶の職務

- 一 僧侶は専ら死者の冥福を祈る。
- 二 開通冥途 人死して七日にこれを行うものにして死者の靈魂陰間に行く路を知らずして途中に迷うことあり。故に僧侶は冥途の路を開き死者をして迷わざらしむ。
- 三 拔度 [ホアツトオ] 人死して七日七日に僧侶を招きて読経するを拔度と称す。これ死霊の苦を抜き、済度するの意なり。しかして拔度は七旬すなわち四十九日または一百日にして止む。
- 四 弄饒 [ランラウ] または大弄楼、饒 (どら) を弄し皿を廻しその他種々なる技を行いもって死者の靈魂を慰むるものなりという。
- 五 施餓鬼 盂蘭盆会に水菓をもって餓鬼に施すをいう。
- 六 打眠床枷 [バアピンランケイ] 本島人は寝台の上において死するを忌む。もし寝台の上にて死したるものありとすればその死霊必ず寝台の框 (かまち) に縛せられ離るるあたわずという。ゆえに和尚を招き読経してのちその框を打離しもって靈魂離散せしむるものなりとなす。
- 七 開枉死城 [クイオンシイシア] 地獄に枉死城という牢獄あり。人、刑のために死し、または縊死毒殺その他自殺せしもの靈魂は閻王必ずこの枉死城に幽閉す。死者死後といえどもなおこの苦を見るは憐れなりとて、僧侶を招き読経してこの牢獄を開きてその靈魂を出す。
- 八 牽水状 [カンツイツン] 溺死者はその死魂水中に入り永久水中にて苦しむという。僧侶疏状を作り仏に対し

てこれを読みその魂を水より引き揚ぐるという。

九 牽血盆 [カヌフイボヌ] 地獄に浸血池と称する血の池あり。婦人産死するときはその魂必ず血池に入れらるという。ゆえに僧侶を招き読経してその靈魂を引揚ぐるをいう。

十 引魂 [イヌフヌ] 人遠方にて死したるときはその魂家に帰らずという。僧侶読経してその靈魂を家に帰らしむるを引魂という。

十一 拝薬王 [パイイオオン] 生前多く薬を服用したるも遂に死したるにより薬王を拝してその罪を謝するをいう。

十二 送葬 [サンソン] 埋葬ののち死魂を再び家に帰らしむるため葬を送りてのち家に帰るをいう。

十三 放赦馬 [パンシアベエ] 功德すなわち供養の祭壇を設け、紙にて数個の人形または馬の形を製し数人の道士和尚等これを持ちて読経しつつ壇の周囲を走り廻り、後これを焼却し靈魂天に昇り、紙または仏となれりという。

十四 洗口願 [セエカウゴアン] 生前よく人の悪口をなしたるもの死したるときは地獄に至り口唇を割かるるといい、その難を免れしめんため和尚に請い洗口願を行う。洗口願は読経の後、紙を水に浸して死者の口唇を洗う。そうして洗い清めれば地獄に至るも口唇を割かるるの難なしという。

第三款 仏教信者の迷信

明治四十年頃桃園庁下に李某なるものあり。仏教を誤信し靈魂は不滅にして鬼神怪異となりまた魑魅魍魎等は実在するものなりと信じおりしが、その後修行と称し家を出で、行く先々にて諸人の喜捨を受け新竹東門外に来たり。水門側の有応公廟すなわち骨堂に一泊せり。夜に入りて一乞食また来りて宿するとき、あたかも五六月の頃の暗夜なりしが、螢盛に飛びあるいは集まりあるいは散りあたかも燐火（おにび）の明滅するに似たり。李某おもえらく、今来たれる乞食は鬼怪の変化なるがゆえに、かく鬼火の現るるものなりと誤信し、該乞食を石にて打殺しいずれもまた刑事被告人となりし一事あり。かくのごとく誤信はその最も甚だしきものなれども、なおこれに似たる迷信の徒、決して尠（すくな）しというべからず。